奉賛会講演集　第四輯

いま　歴史の転換点で

浜田益嗣

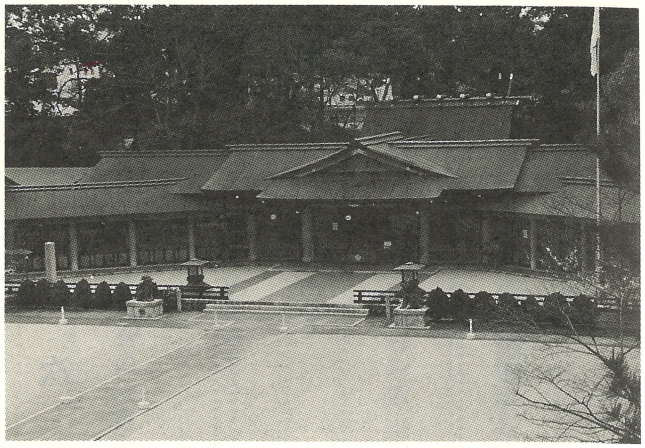
三重県護国神社奉賛会

三重県護国神社奉賛会主催
第四回公開講演会

いま歴史の転換点で

㈱赤福取締役社長
浜田益嗣

平成二年十月九日
於 三重県護国神社参集殿



三重県護国神社

明治二年津藩主藤堂高献公が、安濃郡津八幡宮（現在津市）境内に小祠を建て、戊辰の役で戦死した藩士の霊を祀る『表忠社』が御創祀であり、以来国事国難に殉ぜられた三重県出身御英霊六万余柱の慰霊および安鎮と感謝の誠を捧げている。

明治七年官祭に列せられ、『官祭招魂社』となる。

同四十二年現在地（津市広明町）に移築遷座する。

昭和十四年、『三重県護国神社』と改称。

昭和天皇・皇太后両陛下には、同五十年十月二十七日行幸啓遊ばされ、御親拝を賜った。

平成元年に、御創祀百二十年・御遷座八十年・御社名改称五十年を迎えた。

毎年春季（四月二十一・二十二日）

秋季（十月二十一・二十二日）の例祭には、県内御遺族を始め奉賛会員・崇敬者等多数が参列している。

目　次

講演会にあたって

三重県護国神社宮司
同奉賛会副会長　宇治土公貞幹

講師略歴……6頁

いま　歴史の転換点で

㈱赤福取締役社長　浜田益嗣

はじめに……7頁
単純化の中に潜むもの……9頁
二十世紀を席捲した政治思想……11頁
地球をとりまく環境破壊……18頁
信仰の時代へ……19頁
史上最悪の社会改革が今崩壊する……21頁
共産主義の構造……24頁
もう一度自由主義をかえりみる……27頁
政治の哲学と力学……29頁
第三の体制は……32頁
「世のために……」は色あせて……34頁
政治の花と根っこ……38頁
自由の存在を危うくするものは自由……43頁
人間優先の時代……46頁
おわりにあたり……47頁

講演会にあたって

三重県護国神社宮司
同奉賛会副会長　宇治土公貞幹

奉賛会の総会に先立ちまして、浜田益嗣先生をお迎え致しましての講演会のお知らせをいたしました処、ご多忙の処お繰り合わせいただき、県下各地からお集りを頂きまして誠にありがとうございます。先程司会の方から説明がありましたように、野中林兵衛会長、本日おいでを頂く様になっており、というよりは本当はもう少し違った日を予定していたのですが、野中会長のご都合で今日にさせて頂いたのですが、急に

昨日、神社にお見えになりまして、十九号・二十号台風の後の処理の問題でどうしても今日地元の方に朝の列車で帰らなければならないので本当に申し訳ないのだけれども、皆様方に宜しくとの事でございました。お伝えを申し上げます。従いまして、会長に代わり、簡単に挨拶を申し上げたいと思います。

今日は大変良い天気に恵まれたわけではありますが、お天気も良過ぎ、かつ日にちも良過ぎまして、津まつりの第一日目という事もございます。せっかく浜田先生お繰り合せ頂いておいでになりましたのに、例年に比べましてもお集まりが多くないと言うよりは、はっきり言って少ないのは、本当に申し訳ない事です。けれども、それだけにお集まりの方々は極めて熱心な方々でございまして、平素からもご英霊の奉賛につきまして格別のお骨折りを頂いております事を、厚くお礼を申し上げる次第でございます。

後程、司会の方から浜田先生につきまして紹介申しますし、皆様方もご承知の通り天下の赤福の社長さんであり、三重県きっての名士であるわけでございます。ただ浜田社長さん自身がご英霊のご遺族であるという事を、ご存じでない方が割合ございます。御先代は日支事変の最初の頃に中国で戦没されました。私は小学生の頃で、同じ学区でございますのでよく存じあげておりまして、本当に穏やかで立派な方でありました事を今も忘れることができません。社長さん自身は、極めて幼い時でございましたのでおそらく写真以外には全然ご存じないのではないかと思います。そんな中からお祖母さんあるいはお母様と一緒に天下の赤福さんに昔からの伝統はありますけれども、現代の中で発展なさっておられますご活躍の様子を、ご尊父さぞかしお喜びの事と拝察致しているわけでございます。

今日は現代の世界の情勢又、日本の国民の将来についてお話を承ることができる事

を意義深く存じております。

余談のようですけれども、昨日午後から、インドの宗教者の方七人が、宗教会議を終えられまして、猿田彦神社の方に寄ってくれまして、神宮参拝の前に二時間半程私の方でいろいろな話をいたしました。その中で、宗教というものが、世界の恒久平和の為に尽くすべき使命というのが非常に大きくなっている。日本の神道については充分には知らないけれども、お邪魔するのは三回目で、いろいろと拝見をしたり、体得をしたり、それにつけて日本人の皆さんが伝統に基づいて、世界の平和に貢献してもらいたいと、多少世辞も入れましてお話を頂きました。いずれにしましても国際的であるという事は、国の枠を超える事でありますが、国の枠を超えるという事は、逆に民族の伝統を完全に身に付けて国の枠を超えないと何も無くなってしまう。従ってそういう伝統的な精神といいますか、心掛けというか、生活の仕方というか、そんなも

のを改めて掘り起こした上で世界的な活動をしてゆかなければならないのではないか、そんな事を話し合った訳であります。

今日は浜田社長さんの若いしかも財界におきましても、あるいは伊勢の式年遷宮を前にし、いろいろご活躍等をふまえた上で、お話を実地に伺えることは、非常に有難い事でございます。よろしくお願いを申し上げ、挨拶といたします。ありがとうございました。（拍手）

浜田　益嗣先生　略歴

生年月日　昭和12年5月6日
本 籍 地　伊勢市宇治中之切町26番地
最終学歴　慶応義塾大学経済学部　卒業
職　　歴　昭和35年　㈱赤福入社
〃　同　専務取締役
同 43年　同　取締役社長
〃　㈱マスヤ取締役社長
同 58年　㈱伊勢萬取締役社長
平成元年　㈱マスヤ取締役会長

主な現公職
皇學館大學常任理事
伊勢商工会議所副会頭
伊勢市観光協会副会長
㈶伊勢文化会議所常任理事
㈶伊勢神宮崇敬会理事
全国銘菓協会監事
㈶三重県水産復興事業団理事　他

いま　歴史の転換点で

㈱赤福取締役社長　浜田益嗣

はじめに

お見受けいたしますと、私より先輩の方ばかりですので、先生と呼ばれましてお話をいたしますことを非常に気にしております。決してそんな者ではございません。私はこういう話を生業としておりませんので、全く思いつきでございます。今日は宇治

土公宮司が是非出て来いというお話で、日頃ご厄介になっており、お断りできませんので参らせていただきました。諸先輩にいろいろご指摘をいただこうかと思い、恥を忍んでお話をさせていただきます。

先程宇治土公宮司からお話がございましたが、実は私の父親が昭和十三年二月の十六日に護国神社に祀られまして、私が前年の五月六日に生まれましたから、満一歳にもなっていない時でございました。以来全く宇治土公宮司の話のように、父親の数え二十六歳の時の写真を、自分の父親としてずっとまいりました。母親は数えの二十三歳から、私がおりましたので後家を通して、今日まで寡婦でございます。

津の護国神社には以前から何か父がいるような気がしまして、前を通る時も頭を下げて通っておりましたが、今日こうやって玉串を奉尊し、お参りをさせていただき、非常にありがたいことであると思っております。私が満一歳になっていませんでした

ので、私が五十歳になりますと丁度五十年祭です。現在私が五十三歳でございますから、もう既に五十年祭も終わりました。伊勢の土地では五十年までは天と地の境目の朝熊山の山頂に御霊が留まっているという言い伝えですが、朝熊山からも離れて逝ったわけです。

単純化の中に潜むもの

気持ちは少しも変わっておりませんが、この五十数年経ちまして、父親が何故に死んでいったのかということを思います。父親には父親ひとつの考えの筋道があったでしょうし、当時の日本には日本の考え方の筋道があったのでしょうけれども、今の時代感覚でいいますと、誠に気の毒な人生であったというように考えます。それだけに

日頃の社会といいますか政治といいますか、あるいは国の在り方、先程宮司は世界の在り方とおっしゃいましたが、いろいろ気になりましてよく考えますけれども、実に最近の風潮、テレビ・新聞の取り挙げ方、政治の取り挙げ方、選挙のやり方すべてに、問題があると思います。思考のおおう余地もない単純化の中にそれは潜んでいると申せましょうか。

先の大東亜戦争が終わって、二度と戦争はいたしませんと言えば全てがもう終わったような戦後の今日であります。昭和二十年八月十五日に敗戦という形となりましたが、八月十六日からまた新しい政治が始まっている訳で、毎日毎年政治とは尽きない動きであります。また、政治が動いているということは、いろいろな問題が起こり、その問題をはらんでまた国の大きな危うい将来に繋がっていくというわけで、現在を直視するという風潮が非常に少ないと思われることに心を痛めている一人です。恐ら

く今日ご参会の皆様もそういうお気持ちではなかろうかと思います。

二十世紀を席捲した政治思想

二十世紀ももう後十年で終わろうとしていますが、私は今世紀の歴史が始まってから大きな出来事が二つあったと思います。ひとつは、１９１７年がロシア革命ですから、丁度二十世紀の初頭から起こってきた政治の理想といいますか、こういう社会になれば人々は幸せになるのだという理想信念が百年たたずに、約八十年を経過したところで、全くこれは理想でも何でもない欠陥制度であったことがはっきりしたことです。

戦後あるいは戦前もそうでしたが、若者はマルクスの『資本論』を持たないとイン

テリではないという時代があり、戦後はまさに社会党・共産党の左翼勢力の全盛でした。この主義思想は科学であると称し、人類は必然の帰結としてこの共産主義社会に至るのであるという確信に満ちて、そして人々を幸せにする戦士の如く闊歩し、全世界にこの政治思想が大いなる発展をみたのです。

けれども、昨年非常に劇的な形をもってベルリンの壁は崩壊し、ソ連の政治体制というものが全くついえ去り、いま収拾がつかなく大混乱です。即ち、二十世紀をおおいました政治への理想主義がなくなり、やはり人の政治は人の手で作り上げていかなければならない、おかしいものはやはりおかしいことで、目先良いことでも、将来いけないことはいけないことだとはっきりいえる時代になってきました。これは人類の主張から言いまして非常に大きな出来事であったと思います。そのことにつきまして今日は若干お話をしていきたいと思います。

もうひとつは、この十九世紀から特に進んできた科学の進歩が、まさに二十世紀を大きく変えたわけですが、二十世紀の終わりになり、必ずしも科学の進歩が人を幸福にするものではないことが分かってきたのであります。科学でありますから、全部法則によって動き、理屈ずくめです。ちょうどまたそういう風潮に共産主義がのったともいえなくないのですが、その理屈ずくめの風潮の中で非常に哲学的でエモーショナルな宗教信仰がどんどん片隅に追いやられて、それを立証することが非常に難しくなったが故に、この人の心をどう自制するかという宗教というものがどんどん小さくなってまいりました。

地球をとりまく環境破壊

しかし、ここにきてこれ以上科学が進むと、反面、新しい問題が出て参りました。現在でも、炭酸ガスをどんどん自動車がまき散らし、後進国が生活水準を上げるためにアマゾンや、インドネシア・ボルネオとかの森林を伐採し、野焼きをして耕地を広げようとします。とにかくこの酸化燃料を非常に多く用いた結果、ご承知の炭酸ガスの温暖化現象が起こり、段々北極の地面が温かくなってきました。後十年すると二十一世紀ですが、地球の平均温度が三度上がると海水面が北極・南極の氷が解け、一メートル水位が上がるそうです。一メートル水位が上がるということは、これは大変なことです。日本の湾岸堤防の構築の構造そのものを根本的に変えなければならない。五度上がると二メートル上がるということですが、バングラディシュのごときは四十パーセント強の国土が失われてしまう。今でもオランダなどでは堤防で国土を支えているわけですから、人類から地球の平地をどんどん奪ってしまうのです。

今年は珍しく十月になってから台風が、土曜の定期便のようにやってきて、今年は大変な気候でした。あながち今年だけの特殊な現象であると考えられない、天候が不順になってきました。私は科学者でありませんので詳しくは知らないのですが、いろいろなガスの層がこの地球を取り巻いていて、この中にオゾン層というのが宇宙からのガンマ線等のいろいろな有害な光線を遮っているのだそうです。今、北極圏の驚くなかれ五十パーセントという広範囲のオゾン層が破壊され、ノルウェー・フィンランドの辺りは夏が短いので、皆外に出て夏の間日光浴をしますが、日光浴をすると、もう今にして非常に高い確率で皮膚ガンになるという状態です。

このまま進むとどういうことになりますか。フロンガスとか我々の生活の中で排しますガスが原因で、ＰＨ４というほとんど硫酸に近いような酸性雨が、今世界的に降っています。これは大気中に吐き出される工場からの煙、いわゆる硫酸雨といいます

が、これがどんどん還元作用され酸素を吐き出しますが、ヨーロッパ辺りではどんどん森林が枯れてきております。人間はこれ以上便利になり、これ以上楽をするために、地球のかけがえのないこの環境を壊滅させてしまっていいのだろうか、という深い疑問が起こってきました。それならば、もしこれを抑えるとしたらどうしたらよいか、法律で抑えられるのか。

日本での酸性雨の大きな原因は中国大陸であるといわれております。春になると黄砂がやってきますが、あれは中国の崑崙山脈とかゴビ砂漠からの砂塵を巻き上げ、成層圏に上がりそれが地上に降ってくるものです。偏西風によって日本の大気の状況がかなり変わりますが、もし仮に中国が日本の空に影響を与えているとすれば、日本の法律だけで治めることができません。地球的な規模でこの環境保全の法律を作らなければならないのです。

今、日本やアメリカ・ヨーロッパのごく一部の国は、非常に国力が進み、国民の一人当たりのＧＮＰも相当高く豊かな生活をしています。冷戦が終わり東西問題が終焉に近づいたといわれますが、これから始まるのが南北問題であります。南北問題の根の深さといいますのは、今回のイラクのクェート侵攻に見るように、アラブの中にも南北問題があるのです。富める国と富まざる国との対立相克があり、この相互をそのままにして、ただ環境基準として百六十四ケ国の合意が得られるかどうか非常に難しい問題です。

もし仮に、よしんば法律でそれが決められたとしても、果たしてそれらが社会で国民に受け入れられるかどうか。すなわち、特に戦後このかた我々の日本の政治制度として、金科玉条のようにいわれてきました民主主義そのものの制度が、結局は人々の欲望というかエゴというかそういうものにおもねる手段でしかありません。人に犠牲

心を要求し、「公のために個というものがもう少し分限をわきまえ、つつましく生活をしなさい。人間という尊厳の理性のために欲望を抑えてもっと知的な生活をしなさい。」、こういうことを言って立候補した政治家は必ず落選します。今度の消費税がまったくいい例で、誰かが納めなければならない税金を、自分だけは納めたくないといって、あの様な選挙結果になるというのが、実は民主主義であります。

今までなんでもなく運転していた自動車から排気ガスを出す。今まで家族の団欒で睦じく揚げていた天ぷらあるいはフライパンの油を流し台から流すことは、実は公害につながる。何とはなしにスプレーで頭をセットしていたことが、実はオゾン層を破壊することになるのです。

信仰の時代へ

だからもっと自分を見つめ自制心を持って臨まないと、これだけ沢山の強欲な人間の住む地球の容量が既に小さくなってきたのですから、どうにかして住んでいる人々が犠牲心を持って住んでもらわなければならない時に、それに対応していくべき制度が何もないのです。もし自制心を抑えるという意味で、実はそのことが人類の歴史始まって以来、イエス・キリストが人間の悪行のために「汝の敵を愛したまえ、その成すところを知らざればなり」と言って、とにかく人間の悪行の為に知っていながらしかも恨んではいけないといって死んだ。そのことによってキリスト教が生まれてきたのです。

マホメットもそうですし、仏教でブッダが百八の煩悩というか人間の欲というもの

を無くすことが人々を幸福にすることであると仏教を説いたのもそうです。その宗教が宗教論として留まらないで、信仰としてそれぞれの人々の気持ちを制することになった時に、初めてその集団として幸せがくるのですが、最近の新興宗教はむしろどちらかというと新興宗教のトップに信仰がいるような宗教が多く、誠に嘆かわしいことであります。その宗教団体にしても、ごく一握りの宗教をしない人々の自由のために信仰するということが著しく阻害されているのです。

恐らく二十一世紀は、反転して非常に強い信仰心というか、人間の能力では量り知ることができない不可知論が台頭してくるでしょう。すなわち、二十世紀科学万能の時代から心の時代といわれますけれども、信仰の時代へ移ってくる大きなターニングポイントが今ようやく見えてくる感じがするのです。最近は非常に難しい神道の書物とか宗教の書物がベストセラーになったりたくさん売れており、奇妙なことです。

明日（平成二年十月十日）は、伊勢神宮のあの神域で、コンサートをやる予定です。どういういきさつでそうなったかは知りませんが、伊勢神宮もよくあそこまで思いきられたと思います。三千枚の入場券に対して二万人の申し込みがあったと、これは珍しいことであります。

今までどちらかというと馬鹿にしておった部分もある信仰の道というのが、今若者の間で非常に熱い眼差しで見られている。少なくとも、あの厳かな神域が厳かな場所として認められてきた。これはまさに相対的に科学の立場が弱くなってきたことの表れであると思います。

史上最悪の政治改革が今崩壊する

この信仰の話をもっとすればよいと思いますが、本日はこの政治の理想をなくしたことのお話をしたいと思います。国力といいますのはやはり国民が結束することです。あのイラクのサダム・フセインという大馬鹿者があれだけの力を持てるというのもやはり国民が結束しているからであり、それが良いか悪いかは別にいたしまして、それだけのパワーを持っている。

アメリカがいち早くあれだけの派兵をしたのも、国家として一つのはっきりとした意志を決めるシステムを持っているからです。日本は二カ月経っても何をしていいのか分からない。顔が見えない状態で、全く見えてこない。そういう意味では、大東亜戦争は必ずしもよくなかったわけですが、国家という顔がはっきりと見えていた。そうして国際関係百六十数人いる人間開係の中で、明らかに一つのリーダーシップを持っていた。今の日本は嘆かわしい感じがしますが、今何故にそういう顔のない国にな

ってしまったことを嘆くばかりでなく、一度考えてみたいと思い、本日参ったわけです。

先程も申したように、日本のマスコミはできるだけこの問題を小さく扱おうという意図が見えて仕方ありません。その問題とは、ソ連が全く行き詰まってしまい、今や大統領であり議長であり全ての職長であるゴルバチョフ一人に権力を集中し、その権力を持ってしても国が治まらない。各個に民族の独立が起こってきて、サボタージュが起こり、軍は向こうをむいて、コルホーズ・ソホーズという農業団体が生産物を出さない。流通に出てこないから貧困のどん底がどんどん拍車をかけて暴動の一歩手前になっている。

まさに崩壊となっているわけですけれども、これは過去数十年の間の政治リーダーがその指導力を誤ったわけでも、或は他国が何らかの干渉をしてそういう形に陥れた

のでもなく、ソ連自体が今まで持っていた政治のシステムそのものが欠陥システムであって崩壊したのです。東ヨーロッパ諸国についても全く同じです。

そしてその崩壊をして、何千万人という人々を虐殺して強制的に行なったこの制度がいけないことが分かっても、今まだ中国ではその制度を維持しようとし、北朝鮮は沈黙を守りその制度というものの延命を計っているのです。決してまいったと自己反省はしないのですが、日本のマスコミはあまりそのことに論をかけようとしません。しかし、共産主義とはどのような制度かを簡単にもう一度お考えいただきたい。

共産主義の構造

十人の子供が並びまして、「よーいどん」と百メートルの距離を一斉に走り出しま

すと、必ず一等から十等まででてきます。これは能力の差ですから仕方のない事です。一等を取りますと名誉を得られますし、賞品をたくさん貰って非常に結構なことです。仮に高校を卒業します十八歳を人生のスタートとし、天からおよびがかかった寿命の時をゴールとしますと、何らかの形で勝組と負組とができてきます。

それぞれの人生観というのが多義多様であり何をもって勝組・負組というのか難しいけれど、私も五十三歳になりまして小学校・中学校のクラス会にいきますと、あまり出てこなくなるのが負組で、よく出てくるのが勝組なのかなという気がします。とにかく何らかの形で自分の思い通りの人生ができたかどうかで一つの結論が出てきます。それが仮に財産形成の格好ですと貧富の差という形になり、「あいつは金を持っていてけしからんじゃないか」ということになり、平等主義者はこれはいかんというのです。「あいつはどうせろくなことをやって金を儲けたのではないから、あの悪い

金はもっと取ってやらなければならない」というわけです。

同時にスタートして、結果が一等から十等まででるならば、十人の子供の足を全部結んで十人十一脚にしたらどうか。これは非常に不自由でありますが、鉦や太鼓で拍子をとって、奇数の人は右あるいは左足と決めてやりますと、確かに皆一直線のままゴールに進みますから結果は平等です。しかしその途中は全く不自由で、何度も隣の人が間違えますから、その度に転び足を擦り剥くし、左の奴は何を考えているのか分からないから、自分のことより人のことを考えるようになります。

自由というものを共有して主権在民であろうとするのが西側諸国であり、日本の政党でいえば自民党です。平等ということを旗印にして、主権在民という建前であります。これは後にお話しますが、まさに官僚の統制でありまして、主権在民という名前だけで実は主権は在民ではないのですけれども、そういう構図をとるのが共産主義

社会主義であり、国家体制としては東側諸国です。

他人がドジをふんではいけませんから横が非常に気になりまして、ソ連やチェコ・ポーランドという東ヨーロッパ諸国では秘密警察が非常にはびこりました。思想管理をやり、いけないものについては曖昧なことをやらないで、直ちに粛清するかあるいは本人自体を抹殺しなければならない。ですからシベリア送りにするとか牢獄につなぎ、教育をするというシステムは全くございません。それは建前であり、それが共産圏の社会であります。

もう一度自由主義をかえりみる

アメリカの場合には、確かにそういう不平等が結果においてはできてきますが、そ

のリーディングゾーンというか、指導層の努力によって人類が新しい知恵というものを得て開発し、その恩恵によって人類がもっと進んで幸せになるものだ。不平等はそのことのための必要悪なのだ、と考えるのが自由主義であります。

フォードという人が出てきませんでしたら、今の自動車はこれだけ大衆的な足にはなりませんでした。ライトという人がいませんでしたら、飛行機というものがなかったのかもしれません。共産圏の、人よりも前に出てはいけないという平等な社会ではこういう発想が全く考えられないのですから、自由主義は素晴らしいものです。

そしてアメリカンドリームという言葉があります。今は貧困であっても、皿洗いのポールゲッティがあれだけの鉄鋼王になれたではないか。ポーランドから汚い船でニューヨークに移民したコンラッド・ヒルトンが、あれだけのホテル王になったではないか。アメリカンドリームとは、混沌としております社会に自分の目標を持ち夢を持

つことです。

しかし、この自由主義も一世代で考えると非常に良いのですが、いろいろ問題点もあります。二世代・三世代にわたりますとスタートが明らかに不平等であったり、あるいは一握りの成功者の集団が、情報や信用とか助け合いの便宜をする、不平等社会の階層社会ができてしまい、必ずしも百メートルを自力で走るという絵に描いたような自由競争がなくなってまいります。

そういう点では欠陥もあります。しかし平等を旗印にした平等主義社会も、今あげたようにソ連や東欧が歩んできたような欠陥があるわけです。

政治の哲学と力学

平等を得んとして不自由を得る、自由に走りなさいとして結果は不平等になる。全員が一等か十等かは知れませんが、とにかく同着になることを前提にすると、途中が非常に不自由になる。ですから社会主義と自由主義すなわち平等主義と自由主義は、全く一緒に同居できないという性格を持っており、妥協点がないわけです。妥協点がありませんから国家として真っ向から反対し、ソ連とアメリカもかっては冷戦時代を長く続けたわけです。

フランス人は、その全く矛盾する二つの考え方の間に矛盾を越えた神の愛、すなわち博愛の精神を挾むことによって、これを繋ぎ合わせることができないかと考え、自由・平等・博愛という三色旗をかかげ、フランス国旗としました。今申しましたように、科学が宗教というものを著しく押しやってきたので、政治の力学としてキリスト教であるとか仏教であるとかいうものが存続しなくなってまいりました。今、マホメ

ット回教については政治の力学として充分に存在していますが、キリスト教も仏教もそして残念ながら神道も、国の政治九十何パーセントの人々が全くそのことを信仰し、その神の為にはいつでも己を犠牲にすることができる社会がなくなってまいりました。

この自由・平等・博愛という精神、平等の良い所、自由の良い所、ただ何の整合も無しにその良い所取りをするようになってきますと、フランスの社会もどんどん乱れてまいりました。精神的にもそれらが共存することができないならば、もう少し知恵で何とか共存することができないか。一等の人から十等の人までそのあがった果実を分け合えばいいのではないか、二等から九等にも分けてあげればいいのではないか、三等から八等の人に分けてあげればいいのではないか。それを国家の権力で搾取して、全く過酷ともいえる税金を取ってこれを敗者に分けてやる。実はこれが福祉国家で、揺り籠から墓場までといい、イギリスとかスウェーデンとか、今日本がまさにそういう福祉国家になっているのであります。

第三の体制は

これは非常に理知的で弱者を救済し、かつ強者には自由に走らせるのですから、非常に良いように見えるのですが、強者の側から不満が出てきたのです。学校の先生が「みんな、百メートル競争で一等になった人の顔をよくご覧なさい。そして十等になった人の顔もよく見なさい。比べて見ると一等になった子は怒ったような顔をして走ってくるでしょう。照れもあるでしょうが十等になった人はニコニコして走ってくるでしょう。やはり一生懸命やらなければなりません。一等になったら名誉があっていいじゃないですか。」と教えているのです。

しかし今、刻苦勉励して課長になり部長になりそして社長になった人々は、今非常に難しい問題の責任を全部背負い込まされ、そして一度失敗をするとその責任を追及されて会社が駄目になる。住民運動があり、労働問題があり、消費者パワーがあり、そして関係監督庁の許認可があり、非常に複雑な厄介な道をぐるぐる回って、相手の主権を侵すことはできませんから、実に無限ともいえる忍耐をした上で、あがった所得のほとんどは累進課税で奪われてしまう。

今度の消費税になる前は、一億円を越える所得については驚くなかれ九十三パーセントという税金を高額所得者は取られていました。地方税が十八パーセント、国税が七十五パーセントですから、一千万円儲けても七十万円しか残らない。一千万円儲けようとしたら七十万円くらいの経費は当然いるわけで、それを認めないという税金であったのです。今はだいぶん良くなりました。

しかし今、アメリカが国家であっても個人の努力にまつわる成果を五十パーセント以上搾取することはできないとして、税金を五十パーセント以下に抑えています。日本もかって江戸時代には四公六民といって、公が四分以上搾取いたしますと、百姓一揆や暴動が起こるので、四公六民が適正規模となっていたのです。随分税金が緩和されたといっても、やはり個人の累進課税では八十パーセントに近い金額であります。企業の所得税にしても赤福を例に挙げて恐縮ですが、同族会社の場合には六十四・三パーセントという高額の税金を取られます。苦労が報われないわけです。そして一回の失敗が破綻に陥るのです。

「世のために……」は色あせて

津市に清水製菓という企業があります。私の親しい友人ですが、若い頃子供に「勉強しろ勉強しろ」と言ったら、「お父さん、僕は何の為に勉強するのか。」と訊きます。「おまえは清水製菓を継がなければならないからだ。」と答えると、「僕は社長になんかなりたくない。お父さんの後ろ姿を見ていると、社長ほど分に合わないものは無いから、後は継ぎたくない。」と言ったそうです。

考えてみるとそれが子供の幸福なのか良く分からなかったので、学校の先生に訊きに行ったら、どの先生もちゃんと答えられなかったそうです。何の為に勉強するのか。かつては世の為人の為に勉強して、人に尊敬される偉い人になる為に教育を受けるという簡単なことでしたが、この頃はなかなかそのようなことは言いません。言える教師がおりません。百人中恐らく一人も何の為にと一言で言える教師はいませんでしょう。

でありますから、確かに考え方としては良いのですが、鬼のような顔をして走る人がいなくなった。アリギリスといって、冬にもギターを弾いたキリギリスがいる。アリの親父が子供に面子が無くなって、夏一生懸命やったけれども、俺達の税金であのアリギリスは食っているのだといわざるをえなくなったわけで、社会がおかしくなってきた。

そうしますとよくしたもので、若者は先をよく見据えますから、何も努力して強者振るよりはダブダブのズボンを穿いて真っ赤な髪でドロップアウトしたポーズをとり、音楽に聞き惚れて弱者振るのです。責任から一切逃れますが、女のように優しい目付きはするのです。そして世の動きを林の中で、木の幹に目玉が付いているように見る事だけは一生懸命します。耳も出ています。絶対に自分は表舞台には出てこないで誰か出しておいて、それがよければその後をついてゆこうというわけです。

一億二千万人がそういう集団になったわけですから、世界規模の政治では日本は顔のない国となってしまいました。すなわち福祉国家が行き届いた結果であります。

戦前の教育を受けまた少なくともその影響を受けてきた人達が、それぞれの社会のリーダーになっています。私は終戦の時が小学二年生で、ある意味では戦中派だといえなくもないですが、私達の世代が死に絶えてまいりますと、日本という国は誠に先行き真っ暗です。スペインがトラファルガー海戦でイギリスの艦隊に敗れ、実に半世紀でついえるのであります。

日本が目先の平等社会、目先のヒューマニズムに踊らされて長期に大きな悔いを残す。ちょうど大東亜戦争が始まる時に、どういう形で全員の若者達を煽動してああいうようになってしまったのでしょうか。全く同じ裏返しが百八十度違うところで今起こりつつある。あの時は東条英機が槍玉にあがり、人身御供にされて今日に至りましたが、今度は誰を人身御供にするのでしょうか。全く嘆かわしいことであります。

政治の花と根っこ

私が不思議でしょうがないことは、今国民が誰も土井たか子さんに、東欧で唱えている社会主義と日本の社会主義がどう違うのかを尋ねないことです。宮本委員長に、日本の共産党があの北朝鮮とどう違うのかを尋ねないことです。そしてどうして北朝鮮が金日成の恐怖政治で抑え切れなくて、日本に突破口を求めてきているのに、金丸さんがなぜああいう妥協をするのでしょうか。

今、日本には本当に政治家がいなくなった。そういう意味では明らかにアラブの方が優れた政治家がいる。これらをどうして訊かないのかとつくづく思うのです。

選挙の度に女性の立候補者がたくさん出てきます。実は昨日、伊勢市の来年度から向こう十年間、中期的には五年間の市の将来を決めます計画審議会がございました。私はどういうわけかこの審議委員に選ばれました。その委員の中に女性の方が五人ほどおられます。その方々達が、「今十歳の子供が十年経ちますと当然二十歳になりますが、その二十歳の子供達に責任を取れるような政治をするためにどうすればよいのかを考えて下さい。伊勢市の教育の基準は三重県で平均以下ですし、社会福祉は老人問題はどうですか。」といろいろ言われたので、これは少しお話をしなければならないと思いました。

花は枝に付いております。枝は幹に付いております。幹は当然根っこによって成り立っております。政治を花で話をするのは結構です。特に選挙の時などはこれ以上ないというように花一杯ですが、根っこがなかったら結果的には花は咲きません。根っ

こは人の目に見えないのです。岩を砕き泥にまみれ、太陽が当たらない所で男性的に根を張るから木が台風でも倒れない。花が良い色で咲くわけですけれども良い所取りですから、今はもう花の色が全く褪せまして、その木自体が非常に不安定になっております。

非常にヒューマニズムに満ちた眠で、三百何十人も都庁の部長職を増やし、やがて都のサービスは電車の料金だけでなく風呂屋の代金まで都から負担するという美濃部都政は、完全に東京都の政治を駄目にし大きな赤字を作りました。そして都庁の役人をしてヤル気を無くさせてしまいました。

東京湾架橋というものが現実のものとなりつつあります。千葉には私の友人の一人でジャスコと提携しています扇屋ジャスコの安田敬一君、対岸の神奈川県の方には、私と一緒にＪＣをし、日本ＪＣの会長もやりました小沢一彦君がおります。この間ち

ょうど時を移さずして東京湾架橋の話をしましたら、千葉県は非常に積極的ですけれども、神奈川県の方は全く消極的でした。わけは、今はもう千葉県と神奈川県との県単位の力の差が完全に替わり千葉県の方が高く、比較しても神奈川県の方は駄目になったからです。今までは第一京浜といいますと非常に活気ある経済道路でしたけれども、飛鳥田県政あるいは革新知事がずっと続いたらあの神奈川県が駄目になってしまったのです。花ばっかりだったのです。根が張らなかったから結局花が萎んでしまったのです。

伊勢市の年間事業費は僅か六十五億円しかなく、しかも二十億円程度を国庫の補助とか県単位の事業とかを合わせ、三倍に伸ばしても六十五億円にしかならないのです。そんなお金を一生懸命取り合うよりは、もう少し生産の方に根を張ることにまわした方が良いのです。

例えば、今伊勢ではどんどん旅館が減り、タクシーも随分経営が悪化しております。けれども観光客がたくさん来て旅館が隆盛になれば、雇う人が増えまして給料も増えます。その賃金が新道商店街とかで物を買い、いろいろな補修や増築ということになり建設業が増えてきます。その建設業界でありますとか商店街・八百屋・魚屋がまた人を雇って物を買います。経済のプラス波及効果というものは、そうやって回転する所にあるのです。

昭和六十三年度の調べではありますが、三重県に観光客がおとしたお金は一千二百四十億円くらいですが、伊勢志摩におとしたお金は八百八十億円です。三分の二を伊勢志摩でおとしているのです。これを何とかしてもとに戻したい。祝祭博を控え、リゾート法適用第一号となったこの時にもっと前向きにその財源を有効に活用しませんか、というお話をしたわけです。

これだけ大衆が政治の中に入りまして、そして福祉国家がヒューマニズムに仮面をかえたエゴの集団になり、お医者さんの組合もそうですし、農業団体の政治意識というのも、民主主義といえばそうかもしれませんが、全部圧力団体になっているのです。伊勢市の計画審議会がやはりそういうことになっているのを肯んじることができませんでしたので、若干その話をしたわけです。

自由の存在を危うくするものは自由

昔の中国の笑い話に、ある若者が母親に小さい時から「お前は偉くならなければならない。早く死んだおまえの父親は本当に偉い人だった。そして人の上に立つには道徳を学ばなければならない。」と言われ続けました。そして出世をするには都であろ

うと、長安へ向かいました。途中、盗賊に路銀を盗られ全く食べられなくなってしまい、放浪の旅をするうちにいけないと知りながらも泥棒の集団の中に入ることになります。面白いのは中国の泥棒というのは、政治が無茶苦茶悪いのと国が広いので、ある時には泥棒ですけれどある時にはかなり良い政治集団になったりしまして、黄巾団というのはやがて官軍になったりしてはっきりしないのです。その泥棒の集団は非常に大勢の集団で、「道徳が無いと集団の長にはなれないというが、親分さんよ、あなたには道徳があるのですか。」と訊きますと、その親分が「馬鹿なことを訊くものだ、道徳が無ければたくさんの長になれるものか。」「そしたらそれはどういう道徳ですか。」と訊きますと、「家や塀を見てこの家にはどれだけの財宝があるか推測して間違いが無いことが〃知〃であり、たくさんの仲間の中で真っ先に乗り込むのが〃勇〃であり、そしてドジを踏んだ仲間を身を挺して助け出すのが〃義〃であり、奪った金

銭を不服のないよう旨く分けるのが〃仁〃である。このような道徳がなくては泥棒の長が勤まるか。」と答えました。なるほどやはり大勢の集団のリーダーは違うものだと、その若者は感心した。という笑い話です。

今、その泥棒の集団みたいな団体が、尊敬すべきお医者さんであってもお百姓さんや漁師さんであっても、その集団の中では通用するけれども、もっと広い日本の国の将来となるとなかなか通用しないのです。そういう集団によって選挙の票という全く真の政治とは異なるエゴの行為によって、国というものが動き、福祉社会が動くのです。

すなわち二十世紀の一世紀かかって、スタートした時は二十五億人くらいでしたが、今や六十億の民がいろいろ知恵を絞って自由といって主権在民でやっても良い所もあれば悪い所もある。社会主義にも大いに欠陥がある。

人間優先の時代

ブレジンスキーというアメリカのレーガン大統領の補佐官をしていた人が、彼がかなり歴史を調べ推定した所によると、スターリンは五千万人を決して下回らない人々を、今のソ連の体制を作るために殺しているとはっきり言っています。アウシュビッツでヒトラーが殺したのが六百万人で、大東亜戦争で戦死された日本の兵隊は、確か私の記憶では二百六十万か八十万人ですから、一桁違う数字であることをよくご記憶していただきたいと思います。毛沢東においては三千万人殺したといわれています。

日本の新聞は、南京で日本軍が五万人殺したことばかり書きますが、同じ時期に登小平は、文化革命の時にもし若者が百万人死んだとしても、十億人の中国国民にとっては何の痛手でもないと公言したのですから、共産主義とは怖い制度です。そうやっ

てきたから大きく崩壊したのです。

共産主義も民主主義も欠点があります。それを併せた福祉国家はどうかといいますと、今申し上げたように、全く欠陥だらけの制度であり、その縮図が日本なのです。

制度として欠陥を内包しているならば、やはり昔と同じ様に手作りで、人々が知恵を出しあってやっていかねばならないとはっきり考えなければならない時代になってきました。人間優先の時代になってきたのです。

おわりにあたり

昭和二十年のあの夏に、我々は「決して犯しません過ちを」といって広島や長崎に原爆の碑を建てたり、あるいはあちこちの戦跡にその言葉を書いたわけですけれども、

今やはり違う過ちを犯してはいないのか。本当に将来子孫を幸福にすることができるかどうか、不安に思うことでございます。今日は愚痴を言いに来たわけではないのですが、マスコミ風潮が単純化して考えている、そのことに大いに警鐘を鳴らしたい。

そしてこの三重県護国神社には六万三百余柱の我々の崇高な先人がお鎮まりになっておられますが、この方々の尊い犠牲を無駄にせず、やはり後世の者がしっかりしなければならないと改めて思うのです。

思うままにしゃべりましてあるいは興を無くされた方もあろうかと思いますが、お許しをいただきたいと思います。今の話については、お配りいたしました小冊子に大体書いてあります。これはちょうど昨年の十二月に、とんでもないことが起こったと、うちの会社には女の子が多いものですから分からないと思い。社内報に書きましたのを小冊子にした物です。十分あれば読めますから、一つ御覧をいただきたいと思いま

す。どうも失礼いたしました。（拍手）

奉賛会講演集　第四輯

平成三年六月十五日発行

発行者　三重県護国神社奉賛会

〒514　津市広明町三八七番地

三重県護国神社内